

◎震災復興に向けた担い手となるリーダー人材の育成、地域活動充実への機運醸成に寄与

No.01	『福島県・相馬地方の住民主体による持続可能な復興ビジョンづくり中間支援』実証事業 東北コミュニティの未来・志縁プロジェクト (H23)		
実施主体	東北コミュニティの未来・志縁プロジェクト	実施市町村	福島県 相馬地方

◎事業の背景

■全体としての課題

- 1) 住居：地震・津波により住居を失った住民と、放射能被害により避難を余儀なくされた住民への住宅支援。
- 2) 雇用：地震・津波による事業所の被災と、放射能被害による操業停止により雇用を失った住民への支援。
- 3) 瓦礫撤去：沿岸部にはまだ大量に撤去が必要な瓦礫が残存。南相馬市を中心に行方不明者も多く、遺体捜索も同時継続。
- 4) 放射能被害：平常時の約5～300倍の大気中の放射線量が地域内で測定されている。それによる健康被害はまだ明らかになっていない。また原発からの汚水放出により海の放射能汚染が発生し漁業に影響。更に農地の多くが放射能汚染により作付けできず。
- 5) 風評被害：放射線量が比較的低い農地においても、風評被害により出荷しても採算が取れない状況。

■住民サイドからみた課題

- 1) 心理不安・ストレス：地震・津波の被害に加え、先行きの見えない原発事故の状況と、眼に見えない放射能の恐怖があり、特に乳幼児や要介護者を持つ家庭は大変な心理不安とストレスを抱えている。
- 2) 生活再建：地域インフラの再生、仮設住宅の建設、公的見舞金や補償金の支払いなどの行政ベースの復興は少しずつ進んでいるものの、一人ひとりの生活基盤の確保、すなわち働く場や恒久的な住まいの確保などについては、依然として先が見えない状態が続いている。
- 3) 地域復興ビジョン：国や県、市町村が中心となって検討を始めているが、ハードや経済復興への取組みが優先されがちであり、人々の暮らしそのものや地域の福祉など住民目線の街づくりが後回しにならないか、またNPO、市民団体、ボランティアなどの支援をどう上手に活かしてコミュニティの再生に繋げるかが課題である。

◎事業の概要

相馬地方の住民が市町村域を超え、地震・津波からの復興と原発被害の克服に向けて語り合い、震災前より更にはいい地域にしていくための対話の場づくりを支援する。そして自然と調和し、健康で幸福に生きられる持続可能な地域の復興ビジョンを住民主体で描き、地域行政と協働しながらその実現に向けてアクションを形成していくプロセスを支援する。

活動①：住民の協働のベースとなる場づくり支援

仮設住宅などでの移動カフェや定点カフェ、もちつき雑煮会など、避難生活の中での被災住民の対話や交流の場づくりを実施した。

「活動②地域づくりを行う人材の育成とグループ化への支援」へとつなげることも視野に、ふくしま復興フォーラム、女性の働く場づくり、放射能不安を減らす取組などを通して外部支援団体等との信頼関係づくりを行った。

活動②：地域づくりを行う人材の育成とグループ化への支援

地元の活動団体に呼びかけて実施したファシリテーション勉強会、勉強会を契機として3回に渡り開催した地域づくりワークショップ「南相馬ダイアログ」を通して、ファシリテーター育成とグループ化などの支援を実施した。

活動③：住民及び行政の協働による地域復興ビジョンづくりへの支援

南相馬ダイアログを活かした住民と行政の対話の場づくりの検討、首都圏との連携など県外を含めたネットワークづくりの検討を行った。

地域の今後のあり方を多くの住民に考えてもらうイベント「南相馬ダイアログフェスティバル」(サブテーマ「～みんなで未来への対話をしよう～」)を開催した。

ステークホルダー	役割
①東北コミュニティの未来・志縁プロジェクト	事業の実施主体
②南相馬市	南相馬ダイアログへの協力等
③アースデー東京	南相馬ダイアログへの協力等
④つながろう南相馬	南相馬ダイアログへの協力等
⑤日本ファシリテーション協会	ワークショップ支援等
⑥東大医科研	放射能不安を除く活動
⑦日本原子力研究開発機構	シンポジウム開催、農地の放射能対策
⑧(社)南相馬除染研究所	除染
⑨太田地区まちづくり委員会	農地の放射能対策、これからのまちづくり
⑩アースサミット2012	地球サミットへの発信
⑪NPO 元気になろう福島	ふくしま会議、アースデー福島の開催
⑫NPO 事業サポートセンター	シンポジウム開催、農地の放射能対策
⑬信頼資本財団	運転資金支援、復興支援協働

(1) 中間支援の特徴（取組の中で見られた工夫や取組が上手く進んだポイント等）

- …中間支援における特徴的な工夫
- …中間支援における失敗と対応

実施中（平成 23 年度）

●被災を乗り越えて未来を語るワークショップなどを関係主体と連携して実施し、ファシリテーターやリーダーの育成に寄与

地域の市民活動団体や日本ファシリテーション協会などと連携して実施したファシリテーション勉強会や、勉強会を契機として未来の南相馬を話し合うことをテーマに実施した連続ワークショップ「南相馬ダイアログ」を通して、ファシリテーターや地域活動のリーダー人材の育成に寄与した。

震災から半年が経った2011年秋ごろから、住民の間にも、「いつまでも被災者という受け身の姿勢でなく、自らの手で未来をつくって行こう」という人たちが現れて、当プロジェクトが目指している取組との協働につながった。

「南相馬ダイアログ」の実施に当たっては、その狙い、目標設定、プロセスづくりなど、多様な関係主体を巻き込んだ企画会議での検討を進め、人材育成に資するプログラム構築を行った。特にファシリテーションをサポートする団体とのネットワークは効果的だった。

●復興ビジョンの策定には至らず

ワークショップの開催などを通して、住民が主体となった復興ビジョンづくりを支援することを企図していた。対話の場づくりはできたが、生活再建が最優先課題である中、ビジョンの策定には至らなかった。

●仮設住宅での交流の場としてのカフェの運営を通して、次のステップであるリーダー人材などの確保へとつなげるには至らず

仮設住宅での交流の場としてのカフェの開設や、運営に若者が従事する経験を通して、次のステップであるワークショップへの参加、地域活動のリーダー人材の確保・育成へとつなげることを企図していたが、生活再建が最優先課題であるなどの問題があり、想定した成果につなげるには至らなかった。

終了後（平成 24 年度～）

●再生可能エネルギーを活かした街づくりの支援

「復興に向けた住民同士の対話の場」の継続は難しい面もあり、実効性のある活動にシフトした。

具体的には、平成 23 年度の取組で培われた南相馬市の関係者とのネットワークを介して、震災後に設立された一般社団法人えこえね南相馬研究機構の理事となり、現地と東京の専門家や団体とをつなぐコーディネートなど、住民主導の再生可能エネルギーを活かした街づくりの支援を行っている。

(2) 成果と課題

（事業の成果）

◎ワークショップやフェスティバルを通じた地域活動充実への機運の醸成

「南相馬ダイアログ」の活動には、多くの住民の参加を得られ、住民活動を活発にするきっかけをつくることができた。特に2012年2月に開催した南相馬ダイアログフェスティバルには、1,500人ほどの方が参加し取組への理解や認知度が高まった。

◎ファシリテーターやリーダーとなる人材の育成

住民主体の復興に向けた対話の場づくりにより、受け身を排してポジティブに街の未来を考えて取り組んで行こうという考え方が強まった。また、ワークショップや研修により、地域住民のなかからファシリテーターやリーダーとなる人材が育ち、これらの人たちが協働することで、新たな街づくりを展開する基盤となった。

(事業の課題)

◎資金確保

事業の継続に向けては、安定的な資金の確保が求められる。

◎事業規模、取組の熟度に応じた資金調達方法の検討

寄付や住民ファンドなどによる支援の継続と拡大を期待したが、想定した支援には至らなかった。

(3) 今後の展望

◎住民主導の再生可能エネルギーを活かした街づくりの支援

住民主導の再生可能エネルギーを活かした街づくりの支援に引き続き取り組んでいく予定となっている。